

宇宙樹 Yggdrasill



会報 2010年11月号
復刊 No.187 (2010.11.19 発行)
北欧文化協会
112-0014 東京都文京区関口 3-13-4
TEL (03) 3941-9792
<http://www.hokubunka.org/>

本誌名「宇宙樹」の由来 北欧神話の根幹をなし、天・地・地下の三界を貫く巨大なトネリコ(イグドラシル Yggdrasill)の樹にちなんだもの

協会創立：1949.10.
本誌創刊：1956.03.

【2010年10月例会報告】

10月29日(月)

「フェルセンと革命の時代—没後200年によせて」

本間晴樹(東京音楽大学教授)

2010年は、1810年6月20日にハンス・アクセル・フォン・フェルセン伯爵が亡くなってから、正確に言えば殺害されてから、ちょうど200年目にあたる。歴史上の人物を記念する行事に熱心なスウェーデン人も、このような不祥事件の記念行事は行わなかったが、かつてフェルセン家の所有であり、今は博物館になっているいくつかの城館では、彼に関する企画展示が行われた。もっとも、あまり多くの来館者は得られなかった様子である。

一方、1809年のスウェーデンにおける革命から数えて、昨年はやはり200周年にあたったため、当時についての研究書や啓蒙書が、ここ数年の間に多数出版されている。その中には当然フェルセンのことが取り上げられているが、それは専ら彼の殺害事件に関してである。フェルセンはスウェーデン史において忘れられた存在ではないが、とくに評価もされていない。と言うより、未だに確かな位置付けが、なされていない様子である。

加えて、スウェーデン国内においてと、国外においてでは、彼の扱われ方に著しい差がある。他国では、彼のフランス革命前後におけるフランス王室との、とくに王妃マリー・アントワネットとの係わりが、しばしば彼の背景を無視して語られ、国内では彼の殺害が、スウェーデン革命の流れの中でのみ取り上げられている。前者においては、彼と王妃との関係が通常の男女関係なのか、それとも純粋な忠誠心に基づくものか、といったようなことがひたすら問われ続け、後者においては、殺害が計画的なものか偶発的なものか、計画的だとしたら誰の計画によるのか、専らその点ばかりが問題にされてきた。

フェルセン本人に視点を据えた実証的な研究は、20世紀前半にフィンランド出身の学者アルマ・セーデルヒェルムによって、初めて手がけられた。彼女はフェルセンに関する基本史料、とくに書簡と日記を徹底的に研究し、紹介するとともに、研究成果を何点も公刊した。以後、A・バートンの著作をはじめとする、すぐれた文献は多数出ているが、とくにフランス革命に関連させてのフェルセン研究は、彼女の業績を基盤にしているといつて良い。他方フェルセン殺害事件に関しては、スウェーデンの研究者T.ネルマン、R.ヘドマン等によって、当時の警察の調書や予審記録、それに日記や回想記録類が存分に調べあげられ、事実関係についてはほぼ隈なく解明されているといつてよいが、そうした史料から洩れていることは、なお謎のままである。

現在まで明らかにされたフェルセンの生涯と業績、及びその背景について列挙してみると、およそ次のようになる。

彼がフランス革命に際して、革命反対・国王擁護の立場を取ったことは明らかだが、彼が行ったことは、結果的には国王と王室を破滅へと追い詰め、むしろ革命の急進化を促進することのみ貢献した。革命以前に宮廷に頻繁に出入りし、王妃とのスキャンダルが広がるのを省みなかったこともその一つだが、更に国王一家のためにずさん極まる逃亡計画を立て、実行し、国民と国王の間を致命的に引き裂いた。また、プロイセン軍総司令官ブラウンシュヴァイク公の名前を使って脅迫的な声明を出し、フランス国民を激昂させて王政廃止へと追いやった。ただ、以上のことは彼の独創で

はなく、多分にスウェーデン国王グスタヴ3世の意向に従ったことであった。父フレドリックと政治的に激しく対立したグスタヴに対し、フェルセンは絶対主義への共感から全面的な支持と忠誠を捧げていたのである。

グスタヴ3世が暗殺された後、フェルセンも反革命陣営において孤立し、スウェーデンに帰ると3世の息子グスタヴ4世に厚遇され要職についた。しかし、グスタヴ4世の外交・戦争政策についていけなくなったフェルセンは、次第にグスタヴと距離を置くようになり、1809年の軍の蜂起によりグスタヴが逮捕、幽閉された時もまったく彼を助けようとせず、平然と新政権、新宮廷に留まった。その彼が、新しい王位継承者カール・アウグスト

を毒殺したという嫌疑をかけられ、市民の集団暴行により殺されたのは、おそらく誤解によるものであった。もっとも彼が、革命に基づく新しい体制や社会にほとんど共感を持っていなかったことはほぼ確かであり、新国王カール13世や革命政府指導者、それに市民にとって疎ましい存在であったことも考えられる。ただそのことから、彼の殺害が誰かによって仕組まれたものであったと判断する、あるいはそれを否定するだけの材料はいまだに見つかっていない。この事件がスウェーデン革命を前進させたのか、むしろ抑止する結果になったのかという、一層興味深い問題も、これから解かなければならない謎の一つである。

【変更】

北欧文化協会のホームページのアドレスが変わりました。

新アドレス：<http://www.hokuobunka.org/>

【新刊案内】

『不思議なボタン』猫の言葉社 2010年

ミルヤ・オルヴォラ作 サッラ・サヴォライネン絵 稲垣美晴訳

・ 2010年国際アンデルセン賞画家賞候補（フィンランド）

【催し物案内】

■ 「スウェーデン クリスマスバザール」

スウェーデンの伝統的な食べ物や飲み物、伝統工芸品

光の女王ルチア姫のコンサートやサンタクロースとの写真撮影など

日時：12月5日 11:00～15:00

会場：スウェーデン大使館（港区）

問合せ：sweajapan@gmail.com

【次回例会案内】 12月例会

講演：「フィンランドの家族の在り方—移り変わりと現状」

講師：坂根シルク（フィンランド語通訳・翻訳家）

日時：12月13日（月）18:30～21:00

場所：京橋プラザ区民館（中央区銀座1-25-3） 会費：1000円（正会員は無料）
